

サムライブルーの

勝利と敗北

サッカーロシアW杯日本代表・  
全試合戦術完全解析

五百蔵容

躍進か？

限界か？

日本サッカーの現在地を、  
ロシアW杯  
全4試合の戦術を  
徹底分析して  
あぶり出す！

なぜベスト16まで勝ち進めたのか？

なぜベスト16で敗れ去ったのか？



# サムライブルーの勝利と敗北

サッカーロシアW杯日本代表  
全試合戦術完全解析

五百蔵容

星海社

139



SEIKAISHA  
SHINSHO



## はじめに

2018年ロシアW杯は「戦術グローバルゼーション」が色濃く反映された大会になりました。

「戦術グローバルゼーション」とは、本書では主にヨーロッパの主要リーグ——プレミアリーグ（英）、ラ・リーガ（スペイン）、ブンデスリーガ（独）、セリエA（伊）、リーグアン（仏）——を舞台に起こっている戦術の発展、その影響の拡大という現象を指します。

近年、サッカーの世界ではジョゼップ・グアルディオラをはじめとした先進的な指導者たちによって爆発的な戦術の進化が起っています。同時に、そういった最先端の戦術を採用可能なビッグクラブに対抗するため、中堅以下のチームが採用する対抗戦術も発展を見せています。デジタルテクノロジーを援用したデータ革命も手伝って、各クラブがそれぞれの身の丈に応じた仕方高度に戦術化・組織化されつつあります。そこに所属する選手たちもちろん、大なり小なり高度な戦術に慣れ親しんでいます。高度な戦術、対抗戦

術が標準化されつつあるのです。レギュラークラスの選手であればなおさらで、そういったトップクラスの選手たちがセレクトされる代表チームもかつてのそれとは様相を異にし始めているといえます。

年間を通じてトレーニングが可能で、必要な選手を「買ってくる」ことができるクラブチームに比べ、代表チームは代表の試合がある時のみ招集されます。前者は300日近くをチームとして過ごし、後者は年間30日〜50日程度しか集まることができません。トレーニングにとれる時間はそれ以下となります。そのため特に近年、恒常的に高度なトレーニングを受ける、質の高い選手たちを揃えた各国リーグのトップクラブが覇を競うUEFAチャンピオンズリーグなどに比べ、「寄せ集め」となる代表チームによって戦われるW杯は、戦術的なレベルやサッカーのクオリティは数段落ちると言われてきました。

一定レベル以上に標準化された戦術を身につけた指導者・選手たちの増加によって生じる「戦術グローバリゼーション」が、その状況に変化をもたらすのではないかと。クラブチームのクオリティとまではいかずとも、これまでのW杯の水準を超えたアベレージの戦術や組織プレーが観られるようになるのではないかと。ロシアW杯はそのような期待に比べ、えうる中身のあるW杯だった、といえます。一つひとつの戦術に「新しさ」がなくなるとも、

そこで示された高質な標準化は「新しい」様相を示していたと思われます。

そんな傾向の中で、サッカー日本代表はどんな風に戦ったか。そのパフォーマンスは、どんな評価を獲得しうるものだったか。大会直前、2ヶ月前にハリルホジッチ前監督を不可解な理由で解任したことで、彼がもたらそうとしたものと実際にピッチで展開されたプレーの相関関係はいかなるものとなっていたのか。

4年ごとのW杯後に、世論に問いうる広汎な分析総括がなされていないようにみえるため、それを行う基盤を作りたい——前著『砕かれたハリルホジッチ・プラン』の執筆動機も、もとよりそういうものでした。そこで分析した、それまでの日本サッカーにはなかった種類の戦略的・戦術的なサッカー、戦術的デュエルを駆使した戦い。世界にキャッチアップするために足場として持っておくべき数々の重要な要素を持ち込もうとしたハリルホジッチは、本戦を指揮することはできませんでした。それらの要素は、前掲書に収録した元日本サッカー協会技術委員長霜田正浩氏のインタビュから垣間見えたハリルホジッチ招聘の直接の理由でもあり、ブラジルW杯までの課題をクリアするための意図でもありました。その面での挑戦は残念ながらできず、新しい経験を積めない大会となりました。そ

の一方で、良い意味でも悪い意味でも、「素」の日本サッカーで勝負できた大会ともなったと言えます。そこから見て取れる成長の跡、積み残された問題、ハリルホジッチの仕事をはじめとした過去との連続性。ロシアW杯で可視化された世界的なサッカーの流れの中で、それらをきちんと詳細に分析・総括し、正しい現状認識に資することが今後の日本サッカーの行く末を議論する上で必要不可欠と信じ、本書を制作した次第です。

本書は、以下のような構成で日本代表のロシアでの戦いを辿っていきます。

まず、本戦直前の西野ジャパンの状況——本戦直前の強化試合から分析できる戦術面、スポーツ面における準備——について簡単に総括します。それを踏まえ、グループリーグコロンビア戦、セネガル戦、ポーランド戦、決勝トーナメント1回戦ベルギー戦とそれぞれ別個に章立てして分析していきます。それぞれの試合(章)は、以下のように構成されます。

## 1 対日本代表戦に至るまでの当該チームの発展プロセス、状況を概観



## 2 実際の試合を15分刻みでプロットし、その中で観られた特筆すべき現象を中心にピッチで実際に何が起こっていたかを、局面分析を交えつつ記録

## 3 試合全体を戦略・戦術面で総括

このような形で、ロシアW杯での4試合を詳細に分析していきます。最後に、個々の試合分析で得られた情報に基づいて今回の戦い全体を総括し、ロシア以降の展望を検討することになるでしょう。日本代表の展開したサッカーがどういうものだったか、世界の潮流の中でどのように位置づけられるか、過去とどのようにに連続性を見いだせるか、考えていきます。最後までお付き合いいただけますと幸いです。

目次

はじめに  
3

第1章

ロシア本戦直前の西野ジャパン

13

第2章

コロンビア代表戦

27

第3章

セネガル代表戦

81

第4章

ポーランド代表戦

119

第5章

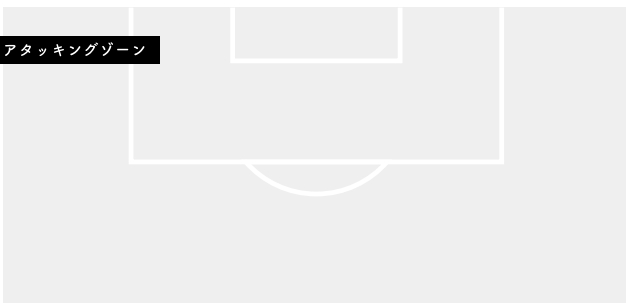
ベルギー代表戦

157

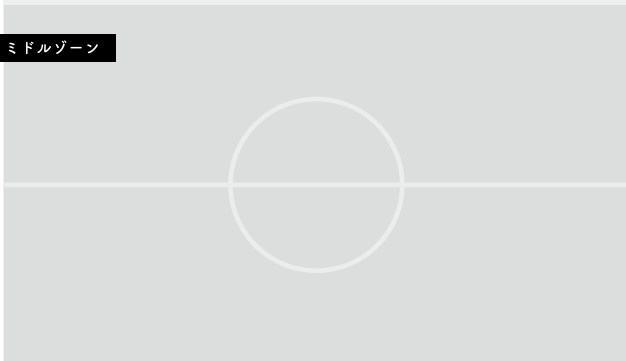
あとがき

219

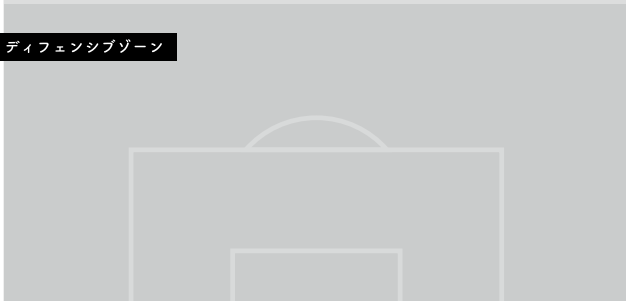
アタッキングゾーン



ミドルゾーン



ディフェンシブゾーン



ポジションの名称、定義と三つの戦略的ゾーン

## ディフェンシブゾーンに基本位置を取るポジション

- **GK** (ゴールキーパー)  
ゴールを守る専任の選手。
- **DF** (ディフェンダー)  
守備を主任務とする選手の総称。CB、SB、WBなど。
- **CB** (センターバック)  
主にゴール前・中央で守備を主任務とする選手。
- **SB** (サイドバック)  
4人のDFを配する4バックのシステムで、最終ライン(DFライン)の両サイドを担当するDF。機を見てミドルゾーン～アタッキングゾーンまで上がり、攻撃参加を行う。チーム戦術によって、攻撃参加の頻度や、敵陣のどこまで侵入してどう攻撃に関わるかある程度設定されていることが多い。
- **WB** (ウィングバック)  
3人のCBを配する3バックのシステムで、一番外側の両サイドを担当するDF。SBより高い位置をスタートポジションとし、ミドルゾーン～アタッキングゾーンへの攻撃参加とDFラインに入っの守備参加を両立する。守備時には3人のCBのサイドを固めるようタスクを設定されていることが多く、そのため3バックのシステムは結果として両サイドのWBが共に下がって実質5バックとすることがある。

## ミドルゾーンに基本位置を取るポジション

- **MF** (ミッドフィールダー)  
直接得点に絡むフォワードやアタッカーの選手とDFラインの間、いわゆる中盤にポジションする選手のこと。位置的に攻撃・守備双方を担当する。
- **DH** (ディフェンシブハーフ)  
MFの中で、DFラインの前に位置し守備を主任務とするMF。何枚のDHを置くかはチーム戦術、採用するフォーメーション、システムによって異なる。
- **アンカー**  
4-3-3や3-1-4-2などのフォーメーションにおいて、DFラインの前に1枚でポジションし、DH任務を行う選手。
- **CH** (セントラルハーフ)  
中盤の中央エリアに配されるMFの総称。DHも含む。
- **IH** (インサイドハーフ)  
4-3-3や3-1-4-2などのフォーメーションにおいて、アンカーより前のラインでポジションするMF。これらのフォーメーションでは、左右1枚ずつ、2枚のインサイドハーフが配される。
- **SH** (サイドハーフ)  
4-4-2や4-2-3-1などのフォーメーションで、左右のサイドを担当するMF。
- **WG** (ウィング)  
4-3-3などのフォーメーションで、FWに準ずる高い位置で、左右サイドに開いて両翼からゴールを狙うアタッカー。現代サッカーではそれだけではないタスクが課されることが多くなってきている。
- **OH** (オフENSIBハーフ)  
FWなどの近くにポジションし、攻撃面のタスクを主に担うアタッカー要素の強いMF。
- **トップ下**  
OHの中でも、中盤の高い位置、FW近くの中央に位置して中盤の低い位置とアタッカーをリンクするようなタスクを担う選手。例えば4-2-3-1だと、3の中央に位置する。

## アタッキングゾーンに基本位置を取るポジション

- **FW** (フォワード)  
フォーメーションの頂点で敵陣に位置し、敵のCBやDFと直接駆け引きしてゴール前に侵入して得点することを主任務とするアタッカー。
- **CF** (センターフォワード)  
特に中央に位置して得点することを主任務とするFW。



第1章

ロシア本戦直前の  
西野ジャパン

## 緊急事態

解任の理由が不可解とはいえ、とにかく決断はなされました。ハリルホジッチ解任という事件そのものがなぜ起こったのか、それは妥当な決断だったのか、正當に議論されるべきであっても、現場としては止まるわけにはいきません。ロシアW杯開幕まで残り2ヶ月、チームとして集合しトレーニング、チーム作りが可能なのは実質1ヶ月という極めて少ない時間しか残されていない中、やれることは限られていたと思われます。

就任会見での西野朗監督の発言をチェックしてみても、西野監督自身、就任を予期していなかったこと、就任に足る準備をしていなかったことがわかります。それも当然です。通常、代表監督をサポートすべき強化委員長がその跡を襲うことは考えられません。田嶋幸三日本サッカー協会会長がハリルホジッチ解任の理由として述べた「コミュニケーションの問題」が本当だとして、その問題をハリルホジッチと協力して解決すべきだったのは他ならぬサポート役であった西野です。それができずに監督解任に至ったのだとすれば、パートナーであった強化委員長も共同責任を取り、同時に退任すべきでした（西野自身もそう認識していたことが就任会見からもうかがわれます）。

ですが、田嶋会長は西野を説得しました。このような事態をあらかじめ想定して、ハリ



ルホジッチを招聘しパートナーとして強い信頼関係を築いていた前強化委員長・霜田正浩（当時）をその職から解き、西野を技術委員長職につけたのだとすれば、ハリルホジッチ解任→西野就任という腹案は初めから田嶋個人の中にあつたのかもしれない。けれども、組織としては「寝耳に水」という事態であつたことは明らかです。もし監督交代の可能性を考慮しリスクマネージメントをしっかりとしていたのであれば、もっとも影響が大きい選手選考の面でも新監督の意向に基づいた基準で選び直すことを想定した準備を、西野をはじめとした強化委員会自体が進めていたはずで、事態は必要以上に緊迫していたと思われます。

結局、西野の手に残されていたのはハリルホジッチのラージリスト（最終選考前の代表候補リスト）のみ。西野は自分自身のヴィジョンに基づいて、ではなく、ハリルホジッチのヴィジョンに基づいて作られたリストの中から選ぶしかありませんでした。後ほど試合分析と総括の中で触れますが、西野個人の監督としてのメソッド、その特質もあいまって、このことは彼の戦略・作戦・戦術選択に大きな制限をかけることになりました。

## 西野のメソッド、その長所と短所

指導者・監督としての西野の特徴は、日本のサッカー指導者の一潮流の典型といえます。戦略・戦術から考えるのではなく、選手の長所を活かすことを第一に考える。選手の長所を見極め、ピッチに送り出す彼らの長所が「化学反応」（西野談）を起こすような組み合わせを見つけ出す——その組み合わせが得られるまで試行錯誤し、得られた後も丹念にメンテナンスし続けるという忍耐力が西野の真骨頂で、それがガンバ大阪での長期政権とJリーグタイトル、アジアチャンピオンズリーグを含めた多数のタイトル獲得につながったものと思われまふ。

ただし、その組み合わせが見つからない場合、試行錯誤だけがひたすら続くことになります。明確な戦術、システムといった「チームとしていつでも戻れる」ベースの構築にこだわらず、むしろチョイスする選手が変わればその長所を活かすという体で戦術、システムも変わるため、チームを完成に導く上で必要となる基準を作れない、または曖昧になりやすいというデメリットが西野のメソッドにはあります。実際、大きな成果を残し長期政権を築いたガンバ大阪退任後に指揮を執ったクラブ——ヴィッセル神戸、名古屋グランパス——では効果的な組み合わせ、化学反応を見いだせないままクラブを残留争いへ導いて

しまいました。

そういった、試行錯誤の時間を必要とする西野のチーム作りのやり方を考えると、本戦2ヶ月前というのは最悪のタイミングともいえました。最終選考に用いることのできるラージリストも、彼が自身の求める「化学反応」のあり方に基づいてリストアップしたものではありません、そのうえ与えられていた実戦は、わずか3試合（ガーナ戦、スイス戦、パラグアイ戦）。「組み合わせ」を試行錯誤するどころか、基本的なプランを試す猶予も西野には十分に残されていなかったといえます。

### 緊急事態下、見いだされたもの

しかし、結果として、西野は本戦で十分に戦える「組み合わせ」を、ファーストチョイスとなるスターティングメンバーに限り短期間で見極めることができた、といえます。

まず、本戦直前3試合のフォーメーション、スターティングの人選をみてみましょう。



ガーナ代表戦の日本代表フォーメーション



スイス代表戦の日本代表フォーメーション



パラグアイ代表戦の日本代表フォーメーション

ガーナ戦のみ3バックの3-4-2-1。スイス戦とパラグアイ戦は4-2-3-1。最終的に本戦で西野が選択した組み合わせはフォーメーションこそ4-2-3-1でしたが人選は異なっていました（GK東口→川島、右SB遠藤航→酒井宏樹、右CB植田→吉田、左SB酒井高德→長友、左DH山口→長谷部、右SH武藤→原口、CF岡崎→大迫）。

西野が準備に使うことのできたこの3試合で、チーム全体として化学反応が得られる「組み合わせ」は、良好なパフォーマンスが見られたパラグアイ戦でも定まっていなかったことがわかります。

西野はむしろ、ユニットごとの適合性を探っていたのかもしれませんが。本戦でのパフォーマンス評価を先取りして記すことになりましたが、かつてセレッソ大阪で驚異的なコンビプレーを展開して得点を量産した香川と乾の間の「化学反応」が時を経ても生きていることが確認されたこと、このユニットが使えるということが、少なくとも攻撃面においてはパラグアイ戦の収穫でした。

パラグアイ戦でこのユニットがいかに機能したか、その機能性に引っぱられる形で、どんな選手が、どのような機能性を見せたかを精査していくと、香川と乾のユニットを中心に築かれたプレー上の関係性が、本戦で実際に演じられた日本代表のストロングポイント

とほとんど重なっていることがわかります。もちろんこのことは同時に、本戦の対戦相手（コロンビア、セネガル、ポーランド）にも分析可能な状態で日本のストロングポイントが晒されたことを意味します。相手のスカウティングを手間取らせるということは本戦直前に体制が変わり実施するサッカーも変わることの数少ない利点でしたが、この機能性をTV放送さえされる公開試合で見せてしまうことはそれを自ら情報発信してしまうことでもありました。実際に、本戦ではこのユニットをめぐる長所・短所は相手にしつかりとスカウティングされ、戦術的なターゲットと見なされてさえました。様々な要因が重なって、このユニットを中心とした相手との駆け引き、せめぎあいにはロシアの日本代表にとってプラス収支となるのですが、その委細はのちに論じることとして、ここではこの機能性がもたらしたものを少し詳しく見てみましょう。

### 香川と乾がもたらしたもの

アタッカーとしての香川と乾は、相手のライン間（主にDFラインとMFラインの間）でプレーすることに秀でているという共通の特長を持っています。この優秀性は、単に足下に入ったボールを正確にトラップする、ドリブル、パスの精度といった単純なボールテク



ニックだけではなく、次のプレーに即座に移行可能な形でトラップできること、そのバリエーション、後ろからボールを受けた後ゴール方向へ瞬時にターンする身体の使い方、などから複合的に得られています。このライン間プレーに関する優秀性によって、彼らは相手ゴール前のバイタルエリア（危険地域）で俊敏なアタッキングプレーを展開することができます。そういったアタッカーが連係して動くことで、相手守備陣に様々な対応を強いることができますし、2人もそのような駆け引きを好む選手でもあります。

トップ下としてバイタルエリア中央を主戦場とする香川。WG、SHとしてサイドを主戦場とする乾。タッチラインギリギリに開いたり内側に絞ってハーフスペースに入り込む乾と香川が絡むことで、基本的な連係が構成されます。彼らがボールを受ける技術に優れていることが、相手守備陣に対する優位性となります。後方からの味方のパスを受けることに長けるため、彼らを監視しているだけでは不十分になるのです。前を向かれてしまったり、直接ゴールを脅かされることから、相手守備陣は直接彼らを潰すかどうか決断を迫られる。そのため、相手守備陣を動かすことができるのです。相手CBとSBの前を香川と乾が移動し続けることで、敵を釣り出し、もしくは制限し、駆け引きの主導権を握ることができるというわけです。

香川と乾のこの機能性がチームの中で確立されると、それを効果的に使おうという意識が強まってきます。そのことでこのチームにおけるプレーの可能性を広げたのが柴崎、長友、そしてCBの昌子です。

柴崎はもとよりプレーヴィジョンに秀でた選手です。ピッチ全体を見渡しながら味方選手的位置や置かれた状況を短時間の内に観察して適切なパスを送ったり、囿のパスを出して相手を動かして味方を自由にしたりといった、高いゲームメイクの能力をもっています。加えて、乾と同じく「ライン間に入ってプレーする」ことの価値が高く評価されるラ・リガでプレーしていることもあり、ハーフスペースに絞ってライン間に入る乾のプレーをすぐに理解したようです。相手守備陣とよい状態で駆け引きできるパスをよいタイミングで乾につけることで、状況を打開しやすいことに彼は気がついているようでした。このことで、香川と乾の機能的な関係性が香川と乾と柴崎の機能性へと広がります。

本戦ではここに、左SBの長友がさらに関わってきます。

香川、柴崎との関係性を高めたことで、乾はより内側に絞ってプレーしやすくなりました。外（サイド）にいるより中（ハーフスペースと中央）にいる方が、相手にとって脅威度が増すからです。

乾が内側に移動していくことで、スタートポジションである外側のスペース（サイドレイン）が空くことになります。長友はもとと攻撃参加に持ち味のあるSBですから、この状況は願ってもないものです。乾の移動に合わせて長友がサイドレインを適時上がっていくことで、互いの動きを連動させやすくなり、相手のマークを分散させたり、的を絞るべくさせることになりました。乾と長友は、相互に恩恵を受けることになったわけです。

その状況を柴崎が見逃すはずはありません。乾と長友の関係性がより効果的になったことは、彼のゲームメイクにより多くの選択肢を提供し、幅を加えることになりました。香川と乾と柴崎と長友と、左サイドの機能的な関係性はさらに広がりました。

最後に昌子が登場します。彼はCBですが、準備期間を通じて、左サイドの関係性に与するプレーをもたらすようになりました。

香川と乾の連係プレーを嫌う相手は、守備ブロックを組み、彼らが使いたいライン間を狭め、彼らをそこへ閉じ込めるようにして対応しようとしています。狭い場所に閉じ込められることを嫌って彼らがブロックの外へ出てくれれば、危険な地域から敵のアタッカーを追出すことになるので、相手守備陣にとっては成功となります。香川と乾の移動プレーを阻止できれば、長友と乾との連係の効果も最小化でき、長友を放置しておくこともできま

す。それでも正確なパスをつけられれば難しい状況になりますが、残るFWで柴崎をチェックすることで、その脅威も減殺できます。

そこで昌子の出番です。誰もマークがつかないことを利用し、ボールをできるだけ高い位置に持ち上がっていきます。その昌子をチェックするために相手のMFラインが動けばチャンスです。それで得たスペースに動く乾、香川に対して昌子はパスをつけられるようになりました。このプレーはパラグアイ戦でも乾の得点の起点となり、相手チームがケアをしておかなければならない要素の一つ、柴崎に自由を与える要因の一つになりました。

チームの立ち上げ段階では、それぞれのテクニックやプレーヤー特性を活かしあう香川と乾の関係性だけであつたものが、その有効性を周囲が活かしていくことで関係性そのものが広がり、香川と乾と長友と柴崎と昌子と、中央と左サイド全体を覆う機能的な関係性に発展したことになります。西野の言う「組み合わせ」「化学反応」とはこのことで、攻撃面の機能性に偏っていること、戦術というよりは個人個人の判断、呼吸が合うことに依存している属人性が強いものであること、という嫌いはありましたが、ともあれ短期決戦を戦うに欠かせない最低限の「基盤」をタイムアップぎりぎりのタイミングで手に入れ、西野ジャパンは本戦に突入することになります。

第2章

# コロンビア代表戦

---

グループ H 第 1 戦

2018 年 6 月 19 日

サランスク

**2 - 1**

勝ち点 3

得点 2

失点 1

得失点差 +1

---

## ロシアW杯本戦の傾向〜ミドルゾーンでの4-4-2ブロック

ロシアW杯における主要な戦術的傾向は、開幕してすぐに明らかになりました。

ジョゼップ・グアルディオラ率いるマンチェスター・シティやマウリツィオ・サッリ指揮のナポリなど、最先端の戦術を駆使するクラブで採用されている「ポジショナル・プレー」を志向するチーム、そういったチームに対抗するためのアイディアを持っているチーム。いくつかの傾向が見られましたが、とくに目立ったのがミドルゾーンでの4-4-2ブロックを敷くチームでした。

ロシアの6月〜7月は春から夏に当たります。ロシアの気候はもとより変動幅が大きく、またロシア⇨北⇨寒い、というイメージと異なり夏は非常に暑くなります。春をまたいで夏に移行することから大会中も気候条件そのものが大きく変動する、試合を行う場所も広大なロシア領内で変動する、場所が違えば気候条件も変わる。そのため、そういった条件に対応できるチーム戦術のバリエーションをセットしておく必要があったことでしょう。バリエーションをセットするといっても、代表チームが全く異なる戦術をいくつも持つておくことは既述の通り難しいので、どんな選手でも習熟している国際標準の戦術を基盤としてバリエーションを積んでいけるようにする。そこで、4-4-2で守備ブロックを組

んで守り、カウンターするという戦術を採用する傾向が生まれたものと思われます。自陣にベタ引きする形ではなく、ミドルゾーンでブロックを組もうとするチームが多かったのは、条件が良好な場合には前からプレッシングをかけ敵陣で積極的な守備をすることをマスタープランとして持っているチームが多かったため、条件次第でそちらにすぐ移行できるようにしておきたいという理由があったのではと考えられます。また、ボール奪取位置は高くできなくともタックルライン（プレッシャーをかけるライン）を中盤に置けるため、様々な要件を満たしつつ敵をできるだけ自陣から遠ざけておける、比較的敵陣に近い位置でボールを奪取し攻撃に移行できるといった目算もあったでしょう。

日本代表初戦の相手、ホセ・ペケルマンのコロンビア代表もそういった狙いを持って本戦に入ってきたチームでした。

### ホセ・ペケルマンの戦略と戦術

本戦に入って、コロンビア代表は守備のやり方を従来のものから修正していました。先に書いたように、ミドルゾーンで4-4-2ブロックを組みながら相手を誘い込んでボールを奪い、あらかじめ空けている（相手に空けさせている）スペースを使ってカウンターす

る、というやり方です。これは、最終予選を通じて本戦直前までコロンビア代表が積み上げてきた主要なゲームモデルとは異なるものでした（本戦直前までのコロンビア代表の戦術、状態については拙著『砕かれたハリルホジッチ・プラン』所収「幻のハリルホジッチ・プランを想像する」内の対コロンビア戦も併せてご参照いただけると幸いです）。ペケルマンがコロンビア代表に落とし込んできた従前のやり方は以下のようなものです。

ミドルゾーンから積極的にプレッシングを仕掛け、DHを中心に縦へ詰めていく。奪ったらハメス・ロドリゲスを経由し、積極的に攻め上がってきてインナーラップ、オーバーラップを仕掛けるSBフアブラや快足SHのクアドラードを使ってカウンターし、サイドから早めのクロスを入れて相手の準備が整わないうちに中央で合わせます。攻め、守り、意思統一ができていたのでトランジションも高速化することができていました。DHが積極的に出ると動いた後のスペース、バイタルエリアががら空きになりますが、そこを使われる場合はCBが積極的に縦に出てインターセプト、すぐに展開して、先述の形のカウンターに持ち込みます。DHもCBもボール奪取能力が高いので、計算が立つやり方でした。ですが、この仕組みを相手に逆用されCBを縦に釣り出され、フアブラが上がっている裏やCBの裏に出られ、というのも失点パターンでもありました。



ミドルゾーンで4ー4ー2ブロックを敷いて、縦方向への積極的なプレッシングを控え、相手を誘い込む形を取る。相手のビルドアップ経路をスカウティングで研究し、ボールの取り所になるエリア、選手を特定しそこにプレッシングをかける。ボールを奪取したら従来通りのやり方でカウンターを仕掛ける……コロンビア代表にとって、この戦略・戦術変更は大きなメリットがありました。

まず、先述のDH・CBの縦進出によるカウンター機会創出の頻度は下がりますが、大きな失点機にもなっていたこのプレー構造を修正したことになります。一方で、ボールを奪ってからのカウンター構造は従前のものを維持できるので、戦術変更による混乱を最小限に抑制でき、スムーズに移行できます。本戦に入ってから環境条件にも柔軟に対応でき、相手のスカウティングも一定程度混乱させることも期待できます。カウンター時の攻撃に厚みをもたらす重要なピースであったSBファブラが本戦直前の怪我で離脱したため攻撃力は減退しますが、CBを釣り出されたうえでファブラの上がった裏を使われるというのが失点構造でもあったので、怪我の功名的にその穴も埋め合わせられることになり、全体として安定性をチームにもたらす変更となったといえます。



もとよりペケルマンのコロンビアは、2012年から続く長期政権で積み上げてきた戦術的な引き出しの多いチームでした。それが、従前の戦術的な骨格を修正したことで大きな弱点を埋め合わせ、かつロシアの環境要因にも対応した攻守の安定性を確保できるチームに変貌していました。ただ弱点を修正しただけではなく、攻守の循環性が確保されていること、とりわけ守備面で組織的に保証された、確実性を高められた安定性があること、これは短期のトーナメント戦を勝ち抜くためには必須条件と言えます。ファブラを欠くこと、そのアイディアとテクニクで攻撃面で違いを生み出すハメス・ロドリゲスが怪我を抱えてコンディションが安定しないことといった問題があったとはいえ、各ポジションに様々な特徴を持ったカードを揃えてもいました。ファブラのバックアップとして起用されたモヒカは、むしろバランスとビルドアップでの貢献を求めるには効果的な人選でしたし、戦術的対応力の基盤となる守備的DHも、運動量は落ちるが豊かな経験でエリアをコントロールできるベテランのアギラールを筆頭にC・サンチェス、レルマなど激しいデュエルを挑め、かつ奪ったボールを効果的に捌く技量をもつ選手が揃っており、中には深い位置から長いスルーパスを正確に出せる、カウンターの起点となりうる選手もいます。得点をもぎ取る場合にはファルカオ、ハメスに加えバツカやキンテロといった、サイドでも中央

でもプレーできるアタッカーが投入でき、戦況に応じて複数のフォーメーションを使える編成を組めていました。ペケルマンは万全の準備をもって大会に入ってきたと評価できます。

### 日本代表に対するペケルマン・プラン

この試合におけるペケルマンの狙いをざっと概観してみましょう。

フォーメーションは4-2-3-1（4-2-1-3とも解釈可能）。ペケルマンが保有しているカードの中では、比較的若い選手を入れたスタメンでした。日本を過小評価しているというより、走力とデュエルで上回り支配する意図の方が強かったのではないかと思われます。ハрилホジッチと異なり、西野の日本代表がボール保持率を高めることを意図した選手の選択、チーム作りをしていることはスカウティングできていたでしょうから。S HというよりはFW、アタッカーの選手であるイスキエルドの左サイド起用も、コンディションの問題でハメスを使えないことで起きる攻撃衝力の低下を補おうとしていたのかもしれない。ペケルマンのチームでは、イスキエルドはIHのタスクもこなすので、不測の事態があっても選手交代せずやり方を変えられるようにしておく意図もあつたでしょう。



コロンビア代表スターティングメンバー

既に記したとおり、ペケルマンもまたミドルゾーンの4-4-2ブロックを選択しています。この試合だけの採用ではありませんでしたが、対日本戦においても意味があるよう——日本の長所を抑え、弱点を突けるよう——用いられています。この攻守のやり方の選択と、どんな選手をどんな意図でどこに起用しているか、が日本代表の長所・短所にしっかりと結びついているのです。

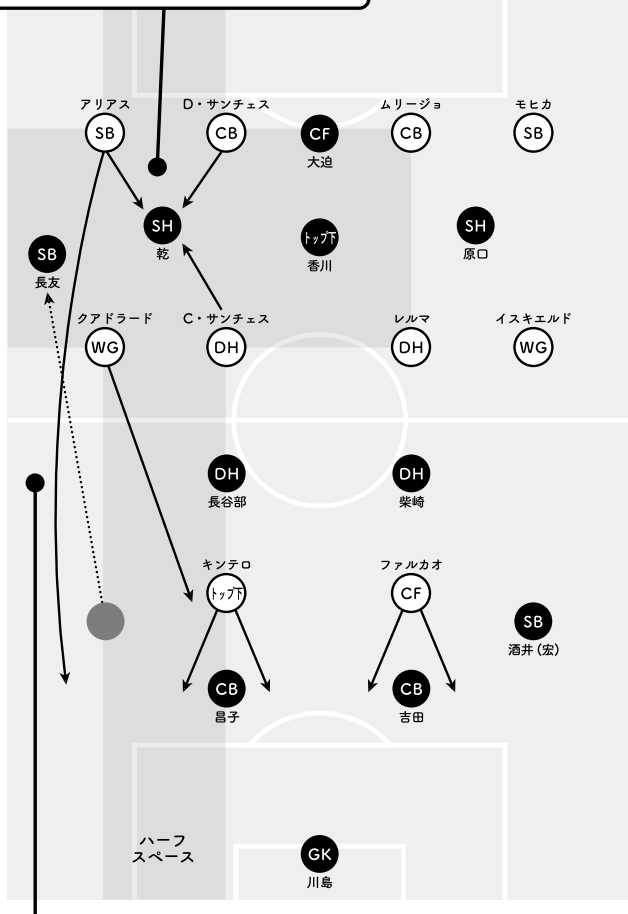
ペケルマンはそこで、西野が本戦直前ギリギリ、パラグアイ戦で見いだしたなけなしの「組み合わせ」を容赦なくターゲットにしています。西野の選んだスカッドとペケルマンのスカッドをかみ合わせて検討してみましよう。



コロンビア代表戦の日本代表スターティングメンバー

①乾～長友～香川のエリアに網を張る

②乾は足下で欲しがるので、そこを狙いボール奪取



日本代表に対するベケルマン・プラン



もともと、コロンビア代表の本戦でのストロングサイドと日本代表のストロングサイドは一致しています（コロンビア右サイド＝アリアス、C・サンチェス、クアドラード。日本左サイド＝長友、柴崎、乾）。

ペケルマンは、西野の日本代表のアタックが、基本的に乾のサイドで脅威となるということスカウティングしていたのでしょう。ここで攻撃を阻止して、長友と乾の裏をカウンターするという意図が見えます。このスタメンでもっともボール奪取を期待できるC・サンチェスを香川と乾を監視できる位置に配する。ライン間に入ってくる乾はボールを足下で受けるので、そこを狙いボールを奪い取り、カウンターランナーであるクアドラードを使い、日本ゴールに迫る……コロンビアのDFは本来の守備のやり方として、足下に送られるパスのインターセプトに長けており、また慣れています。実際の試合でもそこを狙い、何度もカウンターを実施しています。自チームのストロングサイドを活かすための策が、そのまま日本のストロングポイントを抑え込む戦略になっていました。試合が始まってから明らかになりますが、この策略そのものに対して日本代表には明確な戦術的対策が準備されておらず、「とにかくボールを奪わない」、「カウンターされたら皆で走って何とか守る」といった「心構え」があるだけでした。ペケルマンにとっては勝ち点3を手にする

る確率を高める上で、おあつらえ向きの状況だったに違いありません。

ですが、わからないものです。実際には、両チームともにおそらく想定外の事象が試合開始直後に起き、ペケルマンのプランは少しずつ崩壊していくことになるのです。

### 対コロンビア戦を試合展開に沿ってプロットする

#### 前半開始…0～15分

日本ボールでキックオフ。日本代表は、細かな対策や対策の対策はともかくとして、コロンビアのベシックなやり方に対するスカウティングはしっかりと行っていました。ボールを突破能力の高いSH(WG)に集め、ビルドアップと攻撃がハーフスペースサイドを中心に行われることを踏まえ、コロンビアと同じくミドルゾーンに守備網を敷いて積極的にパスラインに入りコースを消し、彼らのビルドアップをハーフスペースサイドに誘導してプレッシャーを仕掛けていく意図が最初から見えます。

対するコロンビア代表は前述の通り、守備のやり方を変えて入ってきます。ボール保持時(攻撃時)は4-2-3-1(4-2-1-3)、ボール非保持時(守備時)はミドルゾーンで4-4-2のブロックを敷きます。DHはC・サンチェス、レルマの守備的なコンビ

を採用。ともにボールレシーバーへのアタックが強くデュエルの能力が高いタイプ。これらDHコンビが前に出てインターセプトを狙うという積極策ではなく、ミドルゾーンで日本のパスワークを待ち受け、奪い取ること、日本のビルドアップルート、ビルドアップグループを消してカウンターすることを意図しています。

おそらくカウンターとミドルゾーンでの守備プランを連動させるためでしょう、コロンビア側に面白い意図が見えます。ワイドの選手、主に右サイド（日本から見て左サイド）のクアドラードが、サイドハーフスペースから中央に絞っている局面が初めから見えます。これは、同サイドのSBアリアスの上がるレーンを空けやすくするだけでなく、日本からボールを奪えるエリアが、中央ハーフスペース周辺（香川、乾のグループが連係するエリア）であることを彼らが想定していたことにも関係しています。彼らのストロングサイドはクアドラードとアリアスが走るこのサイドになりますが、クアドラードが、ボールを奪い取れる期待値の高いエリアと同一のレーンでボールを受けやすい位置に移動することで、彼がカウンターの起点となれる確率が高まります。前述の通りアリアスが上がるレーンも空けておけるので、カウンター時にただワイドを使うだけではなく中央ハーフワイドの広いレーンを選択的に活用できる可能性も同時に高まります。

このポジショニングはまた、日本の守備が人についていく傾向にあることも組織的に織り込んでいます。トップ下のキンテロとCFのファルカオが攻守にわたりサイドやハーフスペースに流れる動きをすることで日本のDHがそれに釣られるため、中央に入ってくるクアドラードはフリーになれる確率が高く、また彼を見るマーカーである長友の守備位置を内側に絞らせ牽制することにも寄与します。さらに、クアドラードにこのタスクを振ることで、守備時、守備に移行するネガティブランジョン時に空いているエリアを埋める配置、移動をさせやすくなっていました。例えば、ボールを逆サイド（コロンビア右サイド）に持ち込んでいるケースで日本のプレッシングを受けたとしても、ボールを活かすことができれば中央寄りに位置しているクアドラードを介してハーフスペースを使ったり、別のサイドを使う攻撃を継続できます。同じシチュエーションでボールを失いカウンタープレッシングを仕掛ける場合、少なくともDHの1枚がボールを失ったサイドに寄せるため、本来2枚のDHが締めておくべき中央のスペースが手薄になりますが、クアドラードがあらかじめ中央に位置しているので、彼が1列下がることでそのスペースを即座に消すことができるのです。自らのカウンター時に全体として走力のあるスカッドにしているのも、日本の機動的なアタッカー、アタッカーのリンケージを待ち受けて潰し、クアドラー

ドのポジショニングを利用して攻防の効率を高めつつ、効果的にカウンターしていかうというプランだったのでしょうか。局面を切り取れば日本のSHも似たポジショニングをしているように見えますが、攻撃時・守備時ともに局面ごとの大まかな約束事を定めつつ、良く言えば個人の判断で、悪く言えば三々五々に動いているためコロンビアの狙いのような再現性の高い、攻守の循環をバランス良く、しかも事前に確保しておけるような組織的準備はありませんでした。

とはいえ、日本の先制点につながったクリアボールからの流れが、コロンビアのこの攻守の準備に連なるカウンタープラン発動から始まっているのは興味深いことでした。そのプロセスを確認してみます。

右CB吉田から右SH原口へパス→SBモヒカがこのパスをインターセプト、カウンターへ移行→モヒカからのパスをファルカオが受けてポストプレー成功→サポートに入っているレルマに落とす→中央にポジショニング移動しているクアドラードにパス→クアドラード経由で、逆サイド（日本左サイド）のアリアスへ→長友のチェックを受け、アリアスは前に行けず、サポートに入っているキンテロに渡す→キンテロ、日本CB間に走り込むフ

アルカオを見るが、日本守備陣が中央に集結しているため出せず、スローダウン↓中央に絞ったままのクアドラードがボールを引き取って持ち上がるが突破できず、モヒカへ戻す↓モヒカ、長友と競るフアルカオへアリーク로스↓昌子がヘッドでクリア→クリアボールが香川に渡る↓香川、高く上がったコロンビアDFライン裏にロブパント（浮き球）でボールを出す。

このボールに対するアプローチをコロンビアDF陣が誤ります。そのミスをうまく突いて裏に出た大迫が、D・サンチェスとの競り合いを制して前に出、GKオスピナとの1対1に持ち込みますが、これをオスピナが制します。そのディフレクション（跳ね返り）に対して走り込んだ香川がダイレクトでシュート、そのシュートをDHのC・サンチェスが手で防いでしまいます。ペナルティボックス（以下BOX）内で得点機会の阻止となり、レッドカードが提示され、C・サンチェスは退場。これで得たPKを香川が決め、W杯初戦で喉から手が出るほど欲しい先制点を日本代表はものにしました。しかも前半開始後わずか3分で相手が1人少ない10人（フィールドプレーヤーは9人）になるという余録付きです。加えて、香川く乾のチェーンを監視可能なエリアでのC・サンチェスのDH起用は、ペケルマンのプランにとっては極めて重要なポイントでしたから、相手のプラン上キーとなる

プレーヤーを試合開始直後にゲームから追い出すという狙っても得られない大きなアドバンテージを日本代表は手にします。しかし、日本代表はこのアドバンテージを活用できませんでした。

まず、コロンビアの対応が迅速かつ的確でした。10人（9人）になったコロンビアは、トップ下にいたキンテロがすぐさまC・サンチェスのいなくなったDHのポジションに下がります。中央では2CBと2DHが4枚のスクエアを組み、両サイドをSHとSB2枚ずつで蓋をし、前線に1枚を置く4-4-1のフォーメーションを、コロンビアは即座に組みました。SHが前に出てワントップ協のスペースからの展開を阻害する形も交えることもありましたが、基本的にミドルゾーンで4枚のDFライン、4枚のMFラインによる4-4のブロックを敷くという本来のプランを回復。混乱を未然に防いでいました。前線のアタッカーを1枚削る格好とはなりますが、SHのクアドラードは前述の通りハーフスペースに絞って攻守のリンクを生み出すとともに、SBアリアスの駆け上がるワイドのレーンを空けて協働してカウンターの経路を維持しており、攻撃の主要プランへの影響も最小限にとどめています。左サイド（日本右）のSBモヒカとSHイスキエルドは積極的には上がらずビルドアップの出どころに専念することで、バランスを取っていました。

次に、日本代表の対応そのものにも問題がありました。「相手が10人となり、かつ自分たちが先行している場合」にどうプレーすべきか準備をしていたのか、していなかったのか。その真相は不明ですが、チーム全体としては当初のゲームプランをそのまま継続していると見ても差し支えないプレー、チームとしての数的優位やリードしているという状況を活かさないプレーを、少なくとも前半は展開していました。トップ下の香川が左サイドの乾だけではなく、右サイドの原口とも関われるよう、日本の戦略である「局面（スモールフィールド）の数的優位」を攻守において得られるよう広く動き続けています。それだけではCFの逼迫が中央で孤立してしまうため、近くにポジショニングして彼をサポートしつつ同時に相手のDHユニットを中央にピン留めする、というタスクも遂行していました。相手のDHを動きづらくさせ、日本のストロングサイドである乾く長友のユニットを活かす意図があったものと思われます。

要するに香川は何でもやっていたのですが、コロンビアはボールを保持すると左右に広く動かしていたので、香川自身もそれによる「局面」の移動につられて動くことになりました。香川のパレーエリアの広さは日本の意図するものではありませんでした。けれども人間はボールより速く動けないため、「局面」の移動をコロンビアにコントロールされる状況では、



そのことで逆に必要な「局面」に間に合わないという事態が生まれていました。コロンビアはボールを広く動かしながらDHとCBによるスクエアをできるだけ維持しつつ香川に対応しており、日本の左サイドから香川を遠ざけるようにプレーしていました。そのため、全体としては数的優位であるにもかかわらず、香川と乾と長友（と柴崎と昌子）のユニットの機能性、日本が最も活用したい左サイドは恒常的に数的同数に置かれて対処される、もしくはサポートに出てくるDH（キンテロ）を加えた3対2を作られ逆に数的優位を取られていました。自チームのストロングサイドを使いつつ日本のストロングサイドを封じたという、コロンビアの従前のプランを活用可能な状況を作為されていたと言え、日本はこのエリアで難なく守備されてボールを奪われ、カウンターを何度も受けています。

## 15〜30分

全体としての数的優位を活かせず、逆にコロンビアに主導権を握られるそんな展開の中、15分に乾の決定機が生まれます。

日本のカウンターを阻止しコロンビアが攻撃に転じるのですが、レルマの不用意な持ち上がりで香川と柴崎がプロテクト、ボールを奪って香川が逆にレルマの空けたスペースに

持ち出します。大迫がCBをピン留めしているので、中央に大きなスペースが生まれていました。香川はすかさずそこへ切れ込みます。香川がフリーで前を向いており、裏へ走り込む大迫へのスループスが出てくる、ミドルを打たれるなどの可能性があるため、コロンビアのCBは動きづらい状況に追い込まれました。そのCBの間を通して、香川はBOX内左に走り込んだ乾に乾にスループス。乾は得意な角度からシュートしますが枠外になってしまいました。

コロンビアの判断ミスを突いた形ではありますが、この布陣のポテンシャルが出たシーンでした。

17分。日本右サイド、パス交換の中でフリーのタイミングを得た柴崎が、逆サイド（左サイド）で高く上がっていた乾にロングサイドチェンジを出します。これが通らずアリアスにカットされ、瞬時に危険なカウンターを受けます。

アリアスはボールをGKオスピナに戻し、オスピナはすかさずキントロにスローします。全体的な数的優位にもかかわらず、キントロをマークする選手も、彼からパスラインを奪えるように準備している選手も配せていません。逆にコロンビアは、既述のクアドラードのハーフスペースへのポジショニングが功を奏し、戻ってくる長友に対して外側、内側の

ランニングコースを意識させることで裏を取り、キンテロのロングスルーパスを引き出し、ワンプレーで日本のBOX内に進入しました。

このシーンは長友がクアドラードに追いついて対応し事なきを得ましたが、このあとのゴールキックから始まり最後は乾の孤立で終わる一連のシーンと併せて見ると、日本が全体としての数的優位を活かしてプレーできない理由が見えてきます。「局面の数的優位」を志向してプレーしているはずの日本が、プレーの流れの中で不利な形で数的同数に陥ったり、極端な数的劣位に置かれる、高い確率でピンチに陥る。そういった局面がなぜ試合を通じてしばしば見られるのか。このコロンビア代表戦だけではなく、続くセネガル戦、ポランド戦、ベルギー戦全ての試合で観測される事態で、本書全体でその構造的な理由に迫っていきたいと考えています。

22分。長谷部がサイド攻防のこぼれ球を拾ってからのドリブル→パスのシーン。15分の香川によるチャンスメイクに似た状況で、大外の乾は裏（BOX内）にボールを要求します。ですが、長谷部はフラットなパスで乾の足下につけました。攻撃は停滞し、要求と異なるパスが来たため、乾は受けることができずボールはタッチを割り、コロンビアボールのスローインになりました。

乾は確かに足下でパスを受けたがるタイプなのですが、逆サイドのゴールネットに対して対角のシュートを打てるBOX内のポイントに走り込めるシチュエーションでは、高い確率で裏にボールを要求します。にもかかわらずここで長谷部が横パスを選択してしまうのには、単に長谷部個人の判断ミスではない、日本サッカーに通底する問題が潜んでいます。「裏に出せる」技術やプレー記憶を濃くもつ「技巧派」「司令塔型」の選手しか裏のスペースにアタックしない、スルーパスを狙わないという傾向があり、そういったプレーヤーでなくともスペースにアタックできるよう、チームとして、グループとしての戦術的な動きを再現性を持つて行えない、という問題です。「相手ラインの裏を攻略する」ことは攻撃にとって最優先のテーマで、これを再現性のある戦術的なチームワーク、グループワークではなくアタッカー個々の適性やイメージの合う・合わないで遂行する、という即興性の強いやり方を取っていたのは、コロンビア戦に限らずボールを支配しているわりに効果的な攻撃ができていなかった大きな理由でもありました。ベスト16で対戦したベルギー代表などは、裏にアタックできる局面でのランニングやパスのベクトルについては、選手個々の自由な判断に委ねられているのではなく、チーム戦術的に定められた局面における「タスク」として規定され、機能していました。これはベスト8以上に進んだチームの多くが

実装しており、前監督のハリルホジッチが落とし込むべく腐心していたものでもありました。相手ラインの裏を即興ではなく再現性のある戦術的なチームワークで攻略する、というのは今後、日本がベスト16の壁を越えていこうとするにあたって避けて通れないテーマになるでしょう。

26分。キンテロのCKにつながったコロンビアの攻撃（アーリークロス、大外走り込み）は、彼らのパターンの一つ。日本は左右に振るコロンビアのポゼッションに対し全体としてスライドしてついていきますが、SHとSBの間に入ってくるモヒカを誰もマークしておらず、アーリーが出るところで規制できていませんでした。

### 30〜45分

31分。コロンビア、交代その1、クアドラードOUTバリオスIN。ペケルマンはDHが本職のバリオスを入れ、DHの位置に落としていたキンテロをクアドラードの代わりにSHの位置に上げました。ペケルマンの意図は、自陣バイタルエリアにおける香川の監視をより強力にすること、バイタルエリアをより広範囲にカバーリングし、入ってくるボールと日本選手により強く守備のアタックを仕掛けること。さらにバリオスであれば1列下

がつてDFラインに生まれるギャップを埋めることもできるので、これまでは基本的に中央に留まっていたCBがサイドのカバーリングに積極的に動きやすくなるという目算もあったでしょう。全体に、DH、CBを中心に守備陣が積極的にボールを奪いに動けるよう、守備のダイナミズム拡充を意図した交代とされます。

これは一種賭けに等しい側面もある策でした。コロンビアは先制され10人になった後も良好なバランスを保ち、日本のビルドアップルートもスカウティングできていてキンテロがDHでもボールを奪えていました。サイドレーン、ハーフスペースを意識したクアドラードのポジショニングも攻撃、守備、トランジション各局面に効いていましたし、何よりカウンターのスピードに乗ったプレーは1人多いはずの日本から主導権を奪う主要因になっていたのです。得点機はコロンビアの方に多く、日本はリードしているにもかかわらず敵陣に人数をかけたリスクある攻撃を続けながら、コロンビアが維持する中央のスクエアとサイドの数的同数形成による守備を崩せていませんでした。

つまり、何も手を打たずとも最悪でも現状のキープ、同点までは見込める展開でした。同点にできれば、逆転を狙える趨勢がコロンビア側に生じた可能性も強かったでしょう。ですが、ペケルマンは守備によりダイナミズムをもたらし、勝ち点獲得のために必要な勢

いが転がってくるのを座して待つのではなく、能動的に動いたのかもしれない。

34分。日本のCKからのポゼッション。乾からボールを奪い日本のDFブロックを押し下げ、バリオスとキンテロのグループワークで長谷部を釣り出すと、その裏でバリオスからのパスを受けたキンテロが巧みなボールコントロールで長谷部と乾のアプローチを止め、その瞬間にDFライン裏に走り込んだファルカオにロブスループス。日本の4-4-2ブロックが甘い——ボールに対してアプローチをかける選手のカバーリングポジションに位置する選手の予測が甘く、ライン間に入ってきたボールホルダーに強いプレッシャーをかけられない——問題点を突いた攻撃。

39分。キンテロのFKでコロンビアが追いつきます。セットプレーのキッカーとしてキンテロを残しクアドラードを下げたペケルマンの決断は、この時点では当たったと言えるでしょう。

キンテロのFKに対して壁は飛ばない、ということになっていたにもかかわらず飛んでしまったため、壁が飛ばないニアを狙うグラウンダーのキックはないという前提で準備していた川島のセービングが間に合わなかった、とされています。この「証言」が真実かどうか、難しいところです。川島の準備がそのように見えるのは確かですが、キンテロに

対してあのように壁を作った場合、壁の飛ぶ飛ばないに関係なくプロテクトされているコースの優先順位を下げたポジショニングをしておくのは当然ですし、速いボールで壁を越えてこられるケースなどを想定し、対応が可能なよう準備しておくのも同様です。「飛ばない」という意思統一が図られていたのに失念されていた、とするなら、主将の長谷部を含めた大迫、吉田、昌子の4人のうち忘れている者、いない者とバラつきが生じそうですが、その全員が迷いなく飛んでいることはいかにも不自然です。2011年のアジアカップ準々決勝のカタール戦でも、川島は左サイドのFKから左足のキッカーに低い弾道の速いボールでニアを抜かれて失点しており、莫大な情報量进行处理し緻密なスカウティングを行うペケルマンのチームがそれを織り込んでおりその狙いが当たった、というのもありそうな話ではあります。

## 後半開始…45～60分

後半、日本はコロンビアの打ち手に合わせた修正を行います。前半はかなり右へ左へと広汎にバイタルエリアを動き回っていた香川が、左サイドへ中央に意識的に留まるようになります。バリオスの投入によってコロンビアの守備に起きた変化——より積極的に人を



潰しに来る——を逆手に取ることが目的でした。

香川でバリオスを釣り、ピン留めしたり引き連れて動くことで中央を空け、乾や大迫が使えるスペースを意図して生み出します。また、自らのストロングサイド（乾と長友）に対し2対2の数的同数で効率的に当たられていたところへ香川がバリオスを引き連れてくることで、3対3の数的同数を強要します。このことでコロンビアの中央を薄くさせ、前半は2CBと2DHでスクエアを組むことで取れていたバランスを崩させることに成功します。攻めあぐねる要因であった中央のポジションバランスを崩せるため、柴崎が高い位置で自由を得やすくなり、ゲームメイクの選択肢を得られるようになり、コロンビア陣内をうかがうボール保持が安定し始めます。CB以外が全員押し上げ、コロンビア陣深く侵入してフィニッシュワークに人数をかける非常に日本的な形が見られるようになり、日本がチャンス数を多く作り始めます。柴崎、長谷部の両DHが敵陣に入り、どちらかがバイタルエリアへのアタックに直接関わり、どちらかがハーフスペースに逃げてボール保持とゲームメイクを担います。中央で相手のカウンターに備えるMFが1人もいないという、被カウンターリスクを最小限に見積もった攻撃偏重の形ではありますが、コロンビアを自陣に押し込めている限り問題は無い、という試合運びでした。

53分。DFラインからの展開から、日本が良い状況判断でチャンスを作ります。コロンビアDHとファルカオの間に大きなスペースが生まれたのを見た昌子が、そこへドリブルで持ち上がります。コロンビアのDHは柴崎と長谷部を見なければならぬので一瞬対応が曖昧になり、高い位置で昌子はフリーを得ます。そこからDF裏へ走る大迫に向け縦1本、裏をケアしようとするムリージョを彼が引きつけたことで生まれたモヒカムリージョ間のスペースへ香川が走り込みます。大迫がそこへ昌子からのボールを落としますが、ここは香川にうまくつながりませんでした。けれども、つながればオスピナと1対1となる大きな決定機でした。日本側が全体的な数的優位によって得られるスペース（コロンビア側の前線守備がファルカオ1枚）や、香川を使った修正で得られるスペース、相手の守備のバランスが崩れるところをチームとして利用できるようになってきたのがよく出たシーンでした。この構造、優位性を活かしたチャンスを日本はこの後も複数作り出していきます。

57分。ファルカオのポストプレーをミドルゾーンで潰して奪ったボール。モヒカを釣る原口のランニング、レルマをピン留めする香川のアクションを利用して柴崎が香川飛ばしで大迫に縦パスを入れます。バリオスとD・サンチェスの間で受けた大迫は巧みに前を向

き、アリアスが高い位置に上がっていたためフリーになっている乾にスルーパスを出します。前半にもあった、乾が裏を取ってBOX内に走り込むパターンで、乾が得意な位置からシュート。後半の修正で作了一連の優位性をうまく使った決定的な攻撃でした。

セネガル戦では決まった同じ位置からのシュートですが、ここはオスピナとコロンビア守備陣のシュートコースブロックが見事でした。

コロンビアは難しい状況になってきました。ワイドのランナー（クアドラード）を下げてしまったため、日本の両SBが上がってくことで空く裏のスペースを素早くアタックすることができなくなり、時間をかけて持ち上がるかファルカオに1回ポストプレーさせる形しかなくなります。日本の守備陣はターゲットを絞りやすくなり、ボールを奪いやすくなりました。

60〜75分

73分。酒井宏樹のシュートまで行ったビルドアップも非常に日本らしい形でした。既にバランスを失ったコロンビア中央のスクエアに入り柴崎のパスを呼び込む大迫。そのパスコースを消すため柴崎にアプローチするバリオス。バリオスが空けたスペースに入ってきて

た乾を見逃さずパスをつける柴崎。バリオスは内側に絞り込んできたアリアスと乾を挟みに動き直しますが、そのことで柴崎がフリーに。乾と柴崎がバリオスに対して2対1を作り、パス交換から前を向いた乾が大迫にパス。ポストプレーを成功させ、コロンビア陣を全体に止めた状態でワンタッチで本田まで落とし、酒井ヘスルーパス、侵入した酒井が大迫につけ、その隙にBOX内に侵入した大迫がCBを背負いながらさらにポストプレー、ゴール前に侵入してきた酒井に戻して酒井シュート。相手のライン間に入った選手たちが、局面的数的優位を作り、手数と人数をかけて崩す、入ったら日本的には最高の形でしたが、これで得たCKで大迫の決勝点につながったのですから、問題なしとしたいところです。

後半73分、大迫の決勝点が生れます。VARが初めて導入されたW杯となったロシアW杯では、これまで以上にセットプレーやPKからゴールが生まれました。大迫のゴールもまた、VARがなければ、コロンビア守備陣は大迫にもっと寄せ、手をさりげなく使って飛ばないようにしたり、不可抗力を装って身体を預けるなどして彼から自由を少しでも奪う（本来なら反則となるか、反則ギリギリの）プレーを試みたはずです。相手がそういうプレーをできないことを活かし、マーカーに対し前に出られる位置を堅持した大迫、そこにピンポイントで合わせた本田の勝ちと称することのできる、見事な決勝点でした。

75  
〜  
90分

試合終了間際にコロンビアがチャンスを作るものの、試合はその後大きく動かず、日本は喉から手が出るほど欲していたW杯グループリーグ初戦の勝ち点3をまさにもぎ取るとともに、ブラジルW杯で惨敗を喫したコロンビア代表に雪辱を果たしました。

### コロンビア戦…総合的な分析と総括

勝ち点3を得はしましたが、コロンビア戦の日本代表は全体としてはナイーヴな戦いぶりだったと評することが出来ます。W杯の初戦で得た望外に有利な状況を、有効に活用して試合をコントロールすることができませんでした。特に前半は、相手が10人（フィールドプレイヤーは9人）であること、自分たちがリードしていることを活用できず、後半も、香川の動き、ポジショニングを修正してコロンビアDHユニットのバランスを崩したことは巧妙でしたが、あまりにも攻撃的に振る舞い被カウンターのリスクを避けきることができない、実際に危険なカウンターを受ける時間帯が長く続いていました。その時間帯を大過なく脱せたのは日本側の戦術的な選択、意図的なコントロールによってではなく、初戦

を勝たねばならないと決断したペケルマンの誤った打ち手でコロンビア側が勝手に強みを、選択肢を失っていくことによって、でした（この点については後ほど詳述します）。戦況を早期に認知し、相手の困ること、嫌がることをチーム全体として行うという面では弱さ、物足りなさのある試合でした。

日本が取り得た組織的なゲームコントロールの選択肢について考えてみましょう。

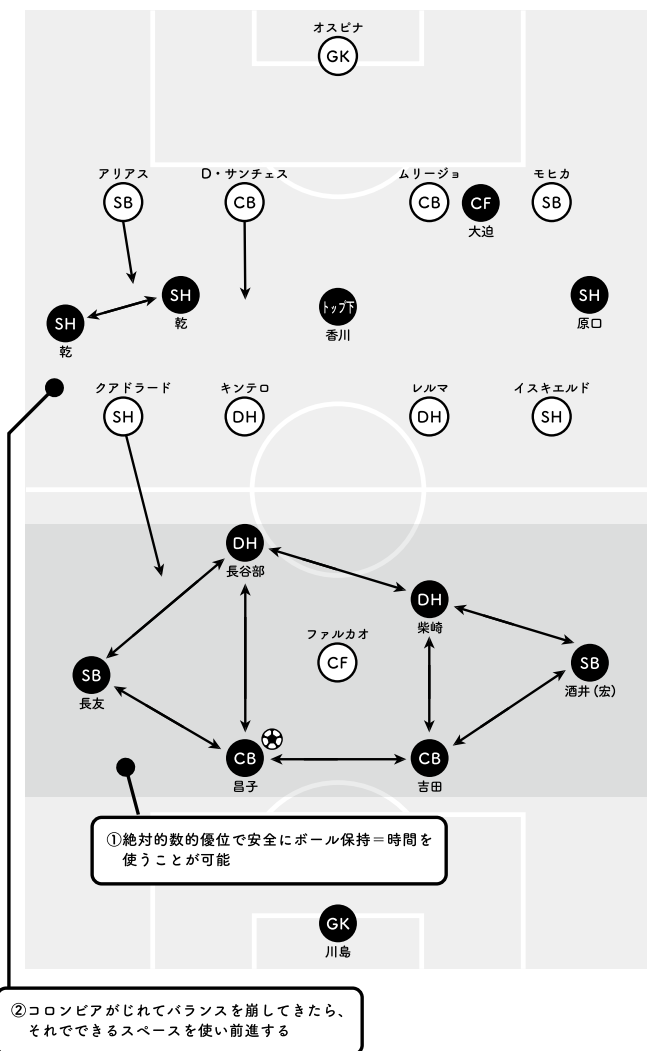
コロンビアは退場者を出し先制点を与えた後、速やかに組織を整え、DHがいなくなつた穴を埋めていたのは確かです。けれども、トップ下にいたキンテロをDHに下げたため、日本のボール保持時、1列目（前線）の守備に入れるのがCFのファルカオだけとなります。通常、4-4-2で守備ブロックを組む場合、前線の2枚が相手のビルドアップ開始点（CB、DH、SBなど）に対して連動したアプローチを行います。激しくプレッシングを仕掛けるのか、敵陣で奪い切るのか、パスコースを切るのか、中央を切つてサイドに出させるのか、サイドを切つて中央に出させるのか、等……はチームの採用する戦術、ゲームモデル（プレーモデル）によって異なりますが、こういった前線からのディフェンスは基本的に2枚以上使えることが前提になります。

コロンビアは、前線ではファルカオ1枚で最低限中央のパスコースを切るだけにとどめ、

ミドルゾーンへ自陣にかけてMF 4枚、DH 4枚の2ラインで守備ブロックを維持することを優先していたため、日本が自陣で行うビルドアップを積極的に阻害することができませんでした。日本はファルカオ1枚に対して2枚のCB、2枚のSB、2枚のDHを自由に差配してボールを安全に保持できる戦況でした。

日本がこの優位性を活用するには、大きく分けて二つの選択肢がありました。

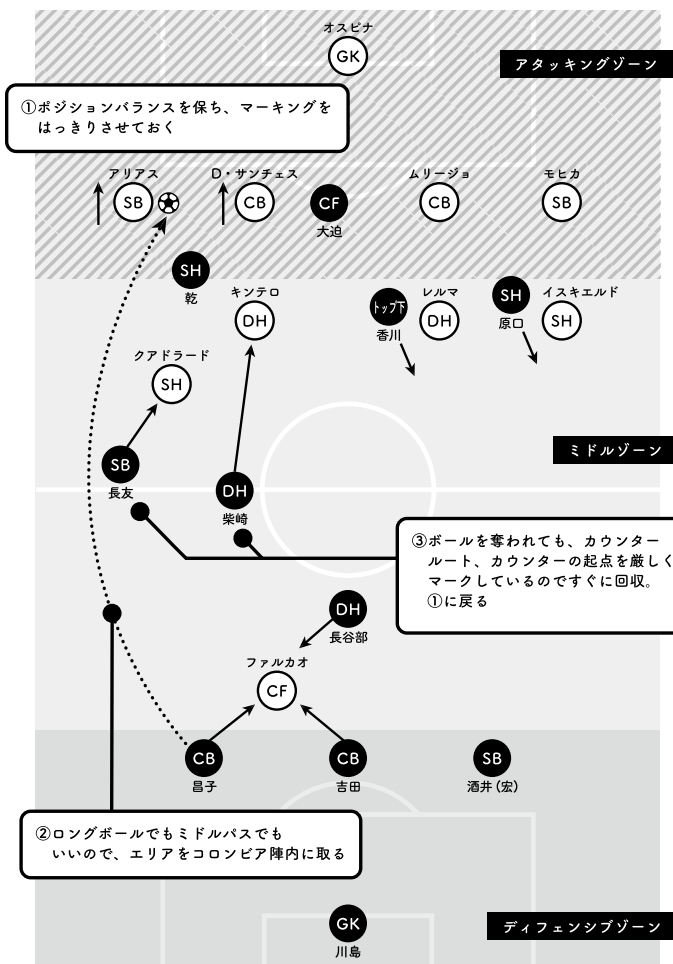
一つは、労せず絶対的な数的優位を得られているエリア——自陣でボールを保持しながら時間を使い、コロンビアが動かざるを得ない状況を作り、バランスを崩したところをカウンターで仕留めること。二つ目は、数的優位を活かして自陣側に罠を張りつつコロンビア陣内にボールを入れていき、彼らにカウンターをさせて自陣内の罠にハマて奪い取る、それを繰り返しつつ時間を使い、コロンビアがバランスを崩した局面で追加点を狙う、というものです。



日本が取り得た選択肢 (1)



アドバンテージを活かし試合を安全に進めるには、二つ目の選択肢がより望ましかったと思われます。コロンビアは4-4-1ブロックからのカウンターを意図していましたが、既述の通り前線のアタッカーを1枚減らさざるをえず、そのため彼らのカウンタールートは、とりわけクアドラードが下がったあとは容易に特定することができた。その状況を冷静に認知して彼らのカウンタールートを計画的に遮断し、カウンターを繰り出しても日本側にボールを回収される、4-4-1で引き続けざるを得ない、押し込まれる、ボールを自陣で奪ったとしてもカウンタールートは常に遮断されている……といった形で、エリアをコントロールするよりよいエリア戦略に基づいて、できるだけリスクをかけずに彼らを可能な限り同じ状況に閉じこめてしまふべきでした。コロンビアがこの状況を脱するには、終盤に実際にそうしたように4-4-1のバランスを4-2-1-2などの形で崩して、攻撃に全振りしてくるしかありません。乾、長友、柴崎、香川、昌子のユニットを前体重にさせとどめを刺しに行くのは、それからでも全く遅くありません。そういった戦略的な選択、チームとしての意思決定をより早い時間に、落ち着いて行ふべきでした。



コロンビアを自陣に張り付ける＝日本陣でプレーさせないようエリアを取り続けることが重要

日本が取り得た選択肢 (2)

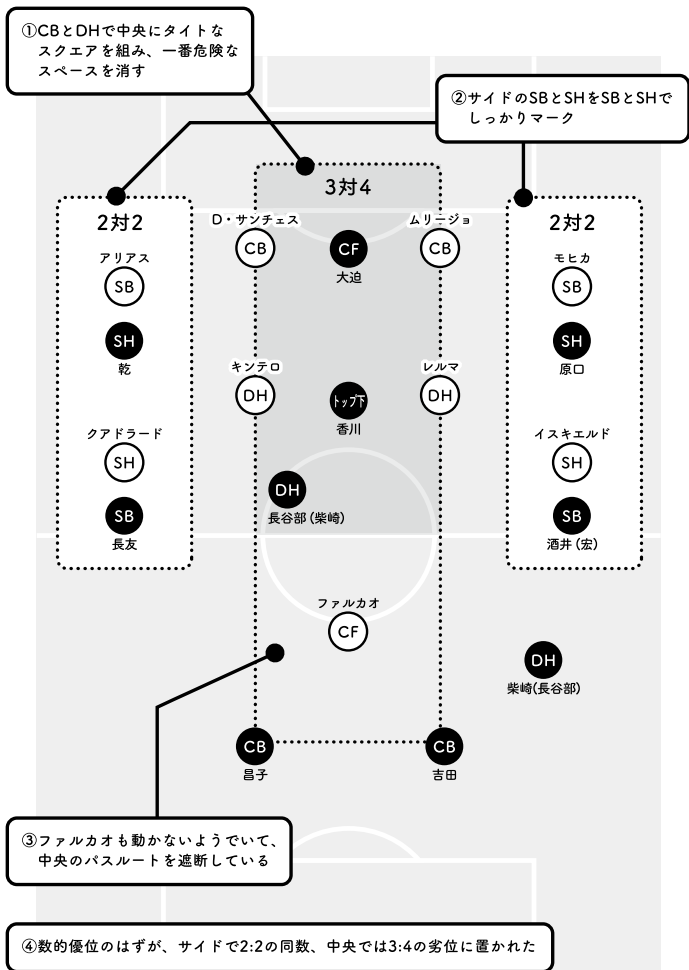
けれども、日本にはそういった選択が可能となるような準備や認知はなかったようにみえます。ディテールの修正はあっても、戦術面・戦術面では前半から後半まで基本的に同じようにプレーしていました。セネガル戦でもそうでしたし、ポーランド戦でも同じです。このナイーヴさ、戦略性を欠いたゲームメイキング、もしくはそれを可能としない戦術・戦術的幅の狭さは、ベルギー戦では試合の帰趨を決する致命傷となりました。

日本代表がそのようなサッカーを展開せざるを得なかった理由として、「直前の監督解任による準備期間の少なさ」「Jリーグ監督時代から顕著な、西野監督の『動かない』性格」があつたのは確かでしょう。一方で、ロシアW杯全般のみならず世界のサッカー、とりわけヨーロッパのサッカーを、日本国内のサッカー全般と比較しながら眺めた時に見て取れる、もつと根本的な「ボールゲームとしてのサッカー」へのアプローチの違いに起因する問題も大きいのではないかと思われます。

それは、「局面（スモールフィールド）での数的優位」を志向するあまり、ピッチ全体の戦況から見た場合むしろ自らに不利となりかねない数的な偏り、数的偏差を生み出してしまい、戦術的により危険なスペースやエリアを容易に明け渡してしまう、という問題です。本書ではこの問題について、分析と総括全体を通じて明らかにし議論に付してみたいと考

えています。この観点から、コロンビア戦の流れを今一度簡単に振り返って見ましょう。

試合早々に10人となったコロンビアは、2CB2DHの4人で形成するブロック（スクエア）で最も危険な中央を締めスペースを消しつつ、SB、SHをサイドのレーンに出して日本のSB、SHを数的同数で対処。動きを牽制しつつボールの奪い所とし、そこからカウンターをするという狙いを見せました。日本も非ボール保持時はできるだけ同じように中央のスクエアを維持しようとしていましたが、2枚のDHが「局面の数的優位」を作るため攻守にわたり頻繁に動くこと、状況が変わったときに動いた先から戻ってくる約束事などが、存在はしますが曖昧で秩序立っておらず、ポジショニング修正の遅さ、そもそも戻らない、2人とも中央からいなくなることすらしばしばある、という形で中央のスクエアを崩し、スペースを晒す局面が多く見られます。特にコロンビアのカウンター時にそこで生じるズレ、ポジショニングエラーによって生まれるスペースを利用されるシーンが目立っていました。



10人のコロンビアのブロックと日本

例えば、2枚のDHが連係を取ったポジショニングで一体的に動かないため、片方は前に出ている、片方はカウンターに備えサイドのサポートに出ている、自分たちでコントロールできる限度を超えて互いの距離が開き相手に中央のスペースを与える、実際にカウンターになったらそこを使われる、急いで中央に集まるが今度はサイドやハーフスペースがから空きになってそこを使われる、プレーに具体的に関与できないまま外に中に振られてしまう……そういったケースがしばしば見られます（今大会の日本代表はもちろん、Jリーグでも）。

もちろんボールは最終的にはゴールのある中央に集まるので、相手のプレーでどう振られようが走力が続く限り相手のフィニッシュをプロテクトできるようゴール前に集まることとできれば、結果としては守れます。本大会の日本代表の「組織ディフェンス」は実際そういうもので、「集団的な走力を発揮し、最終段階で戦術的エラーや味方のエラーを帳消しにする」という意味では極めて規律の高い「人海戦術」的な守備といえるものでした。

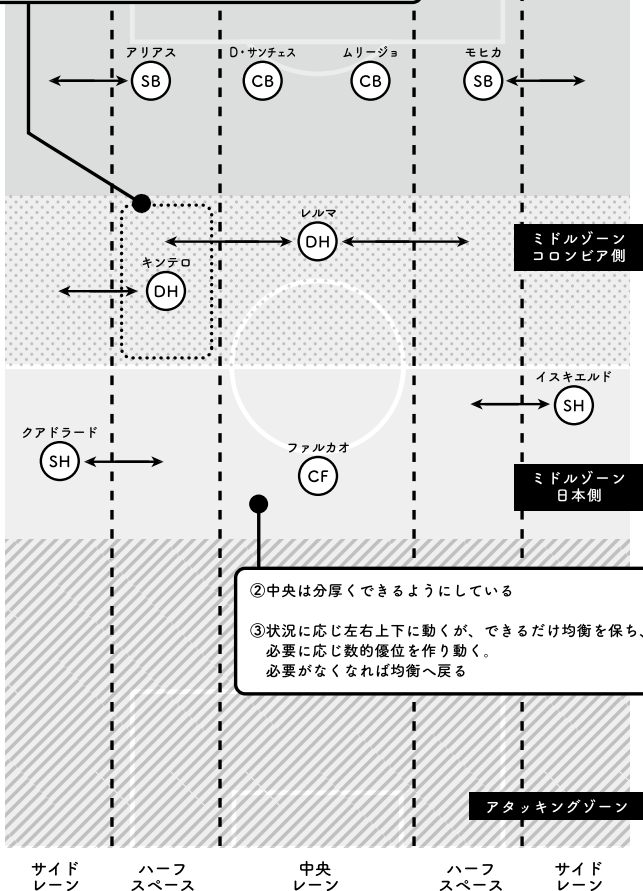
ただ、コロンビア戦ではそういった局面的数的優位を別の局面での数的劣位に結び付けられて、相手が1人少なくなつて得られたはずの全体的な数的優位が消されてしまい、コロンビアに主導権を握られる格好となりました。コロンビア側から見ると、互いの位置関

係を把握できるグループを組んで危険なスペースを消し、日本のストロングサイドを数的同数で守り、優位性を消し去ることで日本にとって危険な数的偏差を繰り返し引き起こしていた、と表現できます。彼らはまた、それで得られるスペースへのアタックにもスムーズに移行していましたし、この守備の仕掛けそのものが、カウンターをしくじった場合の準備にもなっており、再現性の高い攻守の循環が実装されていました。

これはポーランド代表も、決勝トーナメントで対戦したベルギー代表のサッカーも同じです。本書を通じた議論を先取りする形で言うならば、彼らのサッカーは「ピッチ全体、戦況全体を考慮に入れた数的均衡」を戦略的に志向するサッカーでした。その数的均衡を組織として自らのコントロールで復元可能なよう戦術化し、その上で局面ごとの数的優位や劣位、偏差を想定していくことで多様な状況やイレギュラーに対応しやすい安全性、安定性を戦略的に確保するのです。数的均衡⇨数的同数状態でも有効にプレーできることが前提となるため、ハリルホジッチが強調していたデュエル⇨1対1の局面が戦術的な意味でも非常に重要になってくるのです。

①レーンとエリアで形成されるグリッド内に人が配置され、最低でも一つのレーンに誰かが配置され、自陣方向のレーンを消しておけるようにしている

ディフェンシブゾーン



ミドルゾーン  
コロンビア側

ミドルゾーン  
日本側

アタッキングゾーン

サイド  
レーン      ハーフ  
スペース      中央  
レーン      ハーフ  
スペース      サイド  
レーン

コロンビアの数的均衡

②中央は分厚くできるようにしている

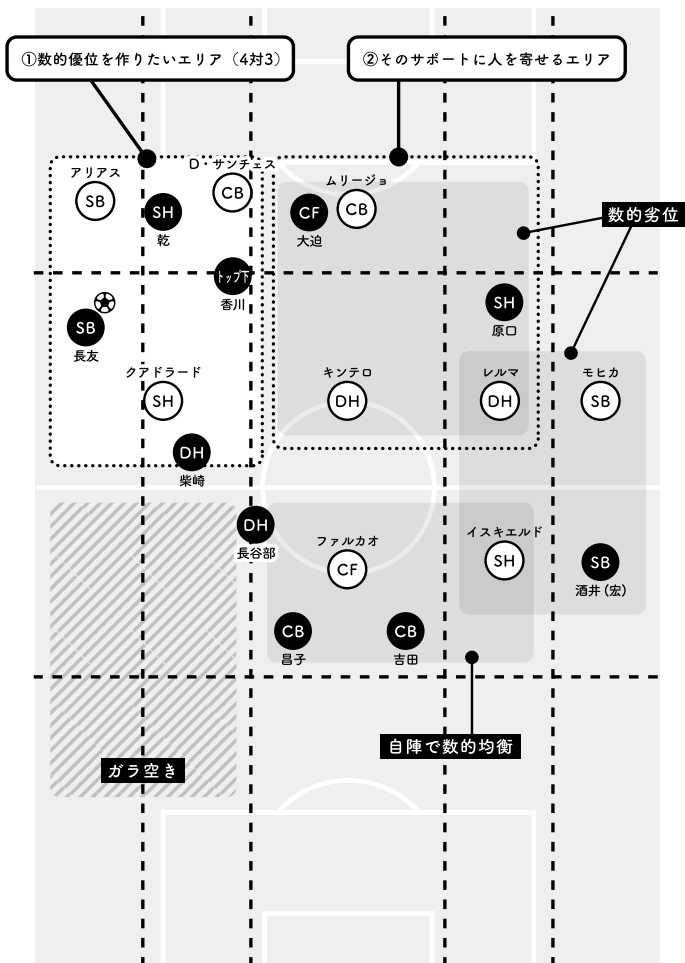
③状況に応じ左右上下に動くが、できるだけ均衡を保ち、必要に応じ数的優位を作り動く。  
必要がなくなれば均衡へ戻る



「日本人はフィジカル的に劣位にある」ことと「狭い場所でのアジリティ（すばしっこさ）と技術の高さ、グループワークとコンビネーションに優れるという日本人らしさ」を結びつけ、「狭い局面（スモールフィールド）での数的優位」で活路を開くという志向性が、日本サッカーの根本にあります。数的均衡（の復元性）を前提としてそこから数的優位、劣位、偏差をコントロールしようという考え方とは真逆のものと云えます。

数的均衡状態の復元性を前提とした数的偏差のコントロールと、局面での数的優位前提の相違が明確に見えるシーンはいくつもあります。コロンビア戦では、例えば前半18分、19分のコロンビアのビルドアップから乾の孤立に至る展開は、観直していただければ「なるほどこういうことか」とご理解いただけるかと思います。コロンビアはシュート局面までに彼らが使用可能な9枚中5枚の選手をかけていますが、攻撃が失敗し乾にボールを通されカウンターされる瞬間、既に乾に対して3枚で包围をかけられるようになっていきます。乾のサポートにハーフスペース、中央際を走る香川を入れても3対2を維持。ピッチ全体、戦局全体に鑑みた数的配置により適切なエリア戦略を立て危険なスペースをコントロール下に置くことで、ゴール前の守備に「数的優位」を作った日本が必然的に孤立させてしまうカウンター要員を消し去っています。

日本代表は、局面の数合わせに執心しすぎて、エリア戦略が立てづらい、相手のスペース攻略の予防をしづらい、自分たちもスペース攻略をしづらいサッカーをやっています。前著『砕かれたハリルホジッチ・プラン』第6章でも論じましたが、サッカーは、過少な人数で過大なスペースを奪い合うボールゲームです。広大なスペースをどうコントロールするか、その観点から組織や攻守、攻守の連関（トランジション）が考えられ、より攻守がシームレスなものになりつつあります。そこでは、局面を数で埋めるのではなく、一定の範囲のスペースを最低限の枚数でどう抑えやすくポジショニングするか、どういう範囲でそのポジショニングをグループ化するか、状況遷移に応じてそのポジショニングとグループ化の適切な関係性を維持できるようどう動くか、広大なピッチにどのようにその動的な関係性を均等に（様々な状況変化に対応できるように）配置していくか、という世界になっています。

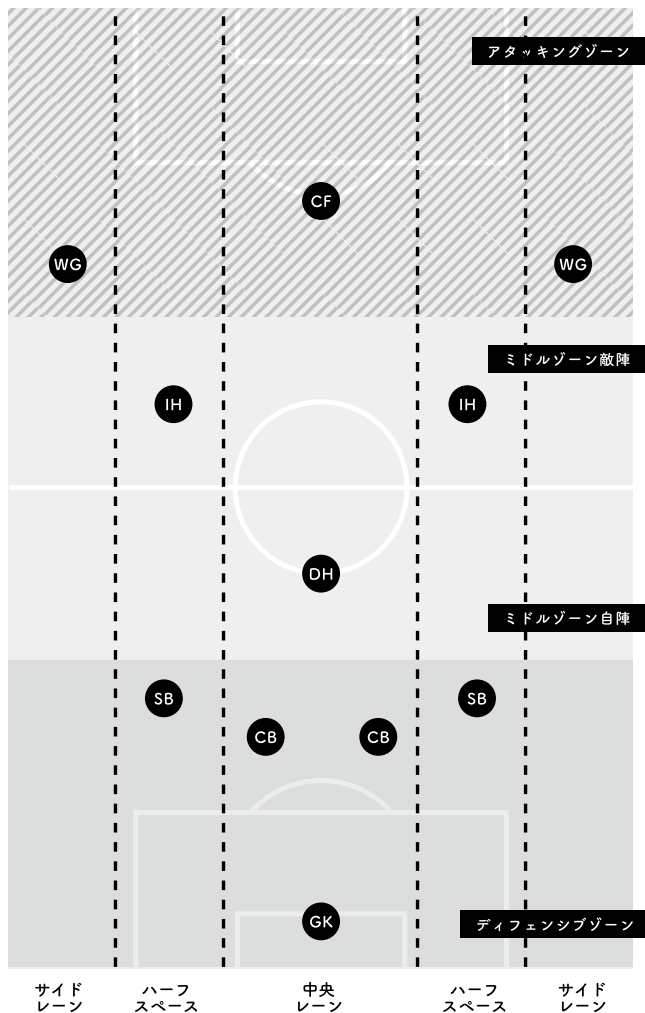


ピッチ全体の戦略状況としては不利に転じるエリアが多すぎる

日本の数的偏差による問題

局面の数的優位、数合わせを求めすぎると、状況が遷移した時に自分たちが使いたいたずの優位性を自ら手放す結果に終わります。前局面の数的優位にこだわったために、次の局面では数的劣位に簡単に陥り、肝心のところで孤立してしまうという現象につながるのです。これは日本的な「数的優位」戦略の深刻な矛盾です。日本の「ボール保持」は、その矛盾を解消するための機会主義的な「戦術」らしきものでしかないのではとすら思えます。つまり、ボールを「ため」て、数的劣位になるはずの次の局面に人数を供給できるように時間を作るわけです。ただし相手もその時間の恩恵を受けて守備の陣形を整えることができるので、思うような優位が得られないという状況が多々生じます。

この矛盾を本来的に解消する手立てが全体的な数的均衡戦略で、現状でもっとも有望視されているのがいわゆるモダンポジションナルプレー原則なのですが、ここまで論じてきたようにこの方向性は日本式数的優位論とは、本質的に異なるものです。そのため、現状の志向をそのまま維持・展開するだけでは、進化し続ける現代サッカーのプレー構造に適応可能な戦略・戦術を整合性をもって形成しづらいのではないかと思われます。局面の数的優位を重視する姿勢そのものを見直すか、それを維持したまま数的均衡戦略とは異なるやり方で、全体的な優位性を作為できるオリジナルな方法論の模索が必要になるでしょう。



どこかのレーン、グリッドに必ず誰かがいる。  
居場所やレーンが重ならないよう配置し、そこをベースに状況に応じ数的優位や同数を  
全体で意図的に作り動く

サッカーが向かう数的均衡戦略（5レーンを例に）

ペケルマンの打ち手についても、総括しておくことが重要と思われます。彼の打ち手は、むしろ日本を助けてくれたと言えるからです。

キンテロをDHに下げ、ミドルゾーンでの4-4-1ブロックにすぐさま切り替えたのは見事でした。彼らはスカウティングによって、日本のビルドアップルートやスコアに結びつく攻撃の起点を把握、そこでボールを奪ってカウンターするメカニズムを保有しており、この形でもファーストプランを遂行することが可能だったということを即時に認知できていたのです。

実際に、計画通りと思われるカウンターを主にクアドラード・アリアスのサイド（乾・長友のサイド）から危険なレベルで繰り返していました。これを許したのは、既述のような日本側の問題です。コロンビアは数字的には劣勢にありましたが、ファーストプランを完全に繰り返せる状況にあつたといえます。

ここでペケルマンは動きました。クアドラードを下げ、バリオスを入れる。その意図は、本職でないDHの位置に落ちたキンテロを今一度SHに上げ、ボールハンターであり捌くこともできる本職のバリオスをDHに入れることで、セットプレーの蹴り手を残したまま従前のプランの強度を高めようということだったのでしよう。

この打ち手それ自体は、妥当性の高いものといえます。

クアドラードを下げて、1枚上がったキンテロを介してファルカオをターゲットにした攻撃は可能でした。もともとコロンビアのカウンター時の決め手は、えぐるクロスよりもアーリークロスからFWを勝負させるものなので、その形は維持できます。アリアスが上がるインセンティブはより高まるため、そこにリスクは生まれます。が、その裏をプロテクトできる、すなわち中央とサイドを動いて守備できるバリオスを入れたことで、リスクマネジメントも考慮されています。実際にこの形でもキンテロ経由でカウンターはできていましたし、攻め込んだところからFKを得、キンテロのキックで同点に追いつけました。

誤算は二つありました。

一つは、バリオスが主に香川を監視するために動きすぎてしまい、主導権を握る要因を自ら手放したこと。CBとDHのスクエアで中央を消し、かつ2枚のSHでサイドの数的同数を制する、という形だったのが、中央のスクエアが頻々に崩れることでバランスと堅牢性を失うことになったのです。香川や大迫はそれを見逃さず、効果的なプレーやラン

を繰り返し、柴崎が彼らにボールを供給し始めました。日本側が香川の動きを修正したことも手伝って、基本的には同じやり方を繰り返すしかなかった日本に「このままでやれる」という見込みと自信をつけさせ、中長期的に考えてモメンタム（勢い）を与えることになります。

また、長駆のカウンターマシーンであるクアドラードを下げたことが、特に二つ目の打ち手以降日本を楽にさせることになりました。ハーフスペースでもワイドでも走りきれ、ハーフスペースを締めもできるクアドラードがいなくなったことによるコロンビアにとつてのデメリットは、すぐには顕在化しませんでした。しかし、日本側にとってみると、長友の裏を突かれたり、乾が戻りきれないところを一気に刺されたりという危険や、行ったり来たりを繰り返させられる局面が減ること、比較的安全性を保ちながらストロングサイドを活かせ、試合内でポジティブなケースを積み重ねることができました。それは、やはり徐々に顕在化していくバリオス投入のデメリットとともに、モメンタムを次第に日本側が獲得する要因になったのです。

さらに、クアドラードを下げた後、例えば試合終盤に相手が暴露するスペースをフェータルに使えるランナーがいると効果的な場合、代替として投入できるカードをコロンビア



は保有していませんでした。サイドでも中央でも、スコアラーとしてもプレーできるバッカ（イスキエルドと交代）は比較的それに近いカードでしたが、この試合で彼が投入されたのは、スコアラーとして振る舞うことに重きを置かざるを得ない局面においてでした。そのため、カウンター時に相手のサイドを侵す、守備時はそこを埋めるというカードを、まさにそれが必要となる局面で確保することができず、右サイドも左サイドもSHを欠いてしまったのです。

そのことも日本を楽にしました。コロンビアの打ち手がどうあれ、日本はサイドを中心に攻めざるを得ません。コロンビア側が勝手にサイドを空けるような選択を採ったことで、日本はサイドでボールをより運びやすく、確保しやすくなり、結果的に守備も容易になりました。コロンビア側からすると、試合終盤に至ってもファーストプランである「ストロングサイドで戦う」以外の方法を持たない日本に対し、まさにその方法のままプレーするだけで試合をコントロールすることができ、という楽な状況をプレゼントすることになつてしまったのです（それでも、局面局面ではハメス、バッカ、ファルカオ、アリアスにチャンネルメイクをされていたわけですが……）。

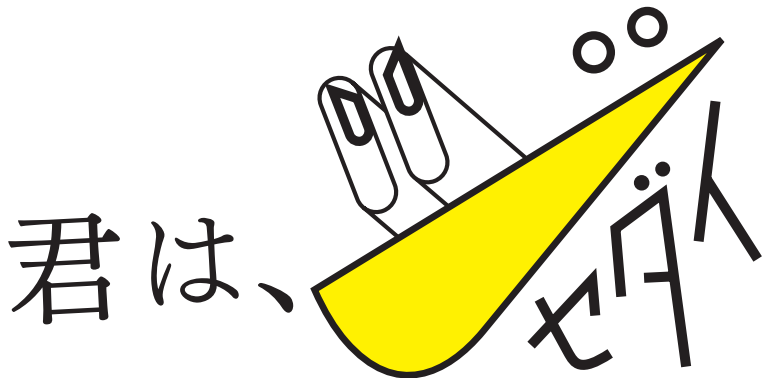
これは、クアドラードを下げることで徐々に顕在化し惹起されるデメリットについて、

そのデメリットが実際に生じたほどの「危険」に発展すると見通せていなかったか、効果的な対応策をペケルマンが持てていなかったことを示すものです。

以上の整理から、ペケルマンの打ち手が日本にとって局面局面では脅威となりながらも、試合を通じた戦術面には「日本が従前のやり方を貫いても」問題がない、むしろ楽になるという状況を導いてくれたというプロセスが見て取れるかと思います。

とはいえ、最初のレッドカード＋PKがなければ、ペケルマンがこのような揺らぎの多い手を打つこともなかったでしょうから、やはり開始3分でのあのプレーが、この試合の帰趨を良くも悪くも決定づけたといえます。単一のやり方でしかプレーできない日本を助けてくれた形でもあり、さらには、準備の足りていない状況で本戦に入ったチームに、このやり方でいけるぞと、たとえそれが気持ちだけのものだったとしても勢いを与えてくれるものでもありました。そしてそれは、短期決戦ではかなり重要な要素になるのです。

日本にとっては、課題と収穫がまさに表裏一体という試合だったといえるでしょう。



君は、

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、  
行動機会提案サイトです。読む→考える→行  
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ  
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう  
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月  
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。  
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、  
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**